

NPO法人

全日本語りネットワーク

〒185-0021 東京都国分寺市南町2-18-3

国分寺マンションB-03A

(Fax) 0237-67-7001 (振替) 00130 - 2 - 114808

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(HP) http://japankatarinet.jp/

2018. 12. 2 発行

ニュース

「第14回全日本語りの祭り in 那須高原」を終えて

昔話研究家 野村敬子(東京都江戸川区)

24号台風の北上中。天地鳴動の那須高原で、私は語りの本源に出会った。激しい風に泡立つように木々は揺れ、窓の外は強大な自然エネルギーに満ちていた。那須町の小中学校生徒さん達の語りを貫く透明な声、ボランティア活動に響きあう郷土愛の確かさは開会時の感動を高めた。加えて懇親会に登場した白面金毛九尾太鼓の轟は、学校語りの「九尾の狐」伝説と連動し、那須高原におおす神々との対話を聴く営みとなった。



その夜は「ひとり語りⅠ」に参加するが、この新企画は最終日のⅢまであって肉声が届く語りの場として私には好ましい試みと思われた。とりわけ初日は嵐の夜語りである。遠い昔、祖先たちが自然の猛威に対峙して寄り添って語り合った夜伽の語りを髣髴させるものであった。私は金基英さんの語りを聴いた。韓国昔話を語り手の母なる口承として味わうことの幸せは測り知れない。語り聴く協調こそが政治を超え、美しい出会いの連鎖を生み出すのである。金さんの終りは恐い話であったが、「それは○○○だ！」大きな声で聴き手を圧倒、まさに折口信夫「古屋の漏り」の理論のままであった。すなわち屋外にいる怪異を屋内の語り声が圧倒し退散させるというもので、これは10月1日の「ナイトストーリー」「世界の幽霊話」にも通底する思想であろう。「傾城阿波鳴門 巡礼唄の段」からスコットランドの「古い家のこわいはなし」など多彩であった。

今回の「お好きな会場をひとつ選んでご参加ください」の企画には感じ入った。主催者には内在するテーマがあったようで、限られた3日間の多様な会場を選んで行くうちに自らの昔話観が試されるようでもあった。語り手の皆さまと交流しながら、その多様性に寄り添いつつ啓かれた境地への到達を自らの試練と考えた。井上幸弘理事長の言葉「いろいろな語りの違いにふれて、改めて自分たちの活動のよって立つ位置を確認する」とある。自己発見の場が14回続くと知り初参加の私は深い想いに誘われた。今回はご健康の問題で参加されていないが、昔話の存続を人生譜として研究と実践活動を続けておられる大島広志さんの存在を改めて認識させて頂いた。一日も早いご回復をと願わずにいられない。

「お国ことばで語るⅠ」に参加、高橋愛子さんの「猿むご昔」を聴いた。なんとも懐かしい故郷語りであった。渡部豊子さんの既成テキストの文字から覚えたということであったが、語り初心者の方言語りとして表現の美しさからは、現代語りが確実な方言を取り込む可能性についての大きな課題を与えて頂いた。お国ことばの概念が緩み続けている現状へ、実に刺激的な語りではあった。最終日「ひとり語りⅢ」井上幸弘さんは、他人の昔話を聴き続けるうちに血縁の如く享受、伝承可能の人間関係文芸の方程式を見事に解明している。今大会は難しい課題と楽しく出会う実験体としての時間に感謝。

那須のみなさま。本当にありがとう！